

Title	『多くの夏を経て』について：神秘主義思想を中心に
Author(s)	三浦, 良邦
Citation	Osaka Literary Review. 18 P.135-P.147
Issue Date	1979-12-10
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25688">https://doi.org/10.18910/25688</a>
DOI	10.18910/25688
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 『多くの夏を経て』について

——神秘主義思想を中心に——

三 浦 良 邦

## 序

1937年、ハックスレーは悪化しつつあった眼病治療のため、アメリカに渡り、W. H. ベイツ博士創案の治療をうけた。そして、そのままカリフォルニアのロス・アンゼルスに定住した。『多くの夏を経て』(1939)は渡米後の第1作で、ロス・アンゼルスを背景にしている。彼は、前作『ガザに盲いて』(1936)で、主人公のアントニーの直面する問題——自我の分裂という問題を解決し、人間が人間として存在するためには、過去・現在・未来の自己を統一し責任を持つべきだとした。また、更に進んで、多様な人生を統一するために、神秘主義思想をよりどころに、人間の理想の生き方は自己の超越、無執着であるとしたが、これは断片的にしか取扱われなかった。作者の進む方向は示されたが、具体的なものは何もなかったのである。しかしながら、随筆、『目的と手段』(1937)後に発表された『多くの夏を経て』は、この随筆をそのまま小説に直したようなより良い未来社会の青写真であり、ここでは、ハックスレーは神秘主義思想を中心に、どうすれば人間・社会全体が良くなるかを考えている。この小説では、Peter Bowering が述べているように、ハックスレーの小説中、『島』(1962)は別として、瞑想的神秘主義とその政治的・社会的問題との関係が最も完全に表現されているのである。<sup>1)</sup> この小論では、神秘主義思想を中心に、作者のより良い社会について考えてみたい。

## I

ハックスレーは、この小説でも、従来におけるように、物質文明社会で墮落し不完全な生き方をしている人物を登場させ、理想的な生活を追求しているが、その1人にストイトがいる。彼はアメリカの大実業家で、彼の

特徴は所有欲の激しさである。彼は金銭欲が猛烈で様々な手段を用いて金を獲得していく。石油、不動産、鉱山、銀行、墓地などの会社を経営し、土地を買占め、彼は巨万の富を築き上げる。また、性をも所有しようと娘のようなヴァージニアに「純粋な父親としての愛情」と「激しい情欲」を感じ、彼女を城に囲っている。

Virginia was his baby, not only figuratively and colloquially, but also in the literal sense of the word. His sentiments were simultaneously those of the purest father-love and the most violent eroticism. (p. 44)

そして、どん欲、横暴で、ボスとして、中世の封建領主のように人間社会に君臨している。

このようなストイトの生き方の象徴が、彼の居住する現代建築とゴシック建築の奇怪な混合のような城である。この城は、前期小説のクローム邸やオールドウインクル夫人の別荘のように、小説を進行させるためのハウスパーティ形式の場ではあるが、それより一歩進んで、この小説では、城は所有者の精神的欠陥、誤った生き方を表わしている。この中世を思わせる城は物質的成功を表わす記念物であり、そこでは古代から現代に至るまでの様々な文化の装飾品が種々雑多に集められ、すべて意味もなく一緒に飾られている。

'Greece, Mexico, backsides, crucifixions, machinery, George IV, Amida Buddha, science, Christian Science, Turkish baths —— anything you like to mention. And every item is perfectly irrelevant to every other item.' (p. 153)

この城はストイトの首尾一貫しない、でたらめな生活を象徴しているわけである。

さて、ストイトは一見快適な生活を営んでいるように見えるが、決してそうではない。彼は短気を起こす度に、血圧が上り卒中が起きるのを恐れ、'God is love. There is no death.' (p. 32) と口ずさみ、年をとり、死ぬのを

恐れている。特に、死の恐怖にさいなまれる彼は、それを少しでも軽減するために、自分が経営する the Beverly Pantheon に死の恐怖を最小限にする色々な工夫を施したり、また、世の中に役立っているという自己満足を得、幸福になるために、the Stoyte Home for Sick Children を経営している。しかしながら、霊園は彼にとって依然として、‘nothing but disease and death and corruption and final judgment’ (p. 205) である。ついには、金儲さえも彼に何の安心も与えないのである。

A year or two from now he would be richer by another million. But the millions were in one world and the old, unhappy, frightened man was in another, and there was no communication between the two. (p. 212)

小説中、第五代ゴニスター伯爵が人生は孤独であり、人間は孤独で生まれ、生き、死ぬと述べているように、彼は孤独で死の恐怖に打ちのめされているのである。そして、彼はオビスポ博士を家庭医として雇い、彼の健康管理と長寿薬の研究をさせている。

## II

死はこの小説の重要な主題の一つである。人間の死に対する恐怖は、以前にもハックスレーの小説で取上げられたことがあった。『くだらぬ本』(1925) のカーダンや『恋愛対位法』(1928) のビドレイクなどにおいてである。しかし、このように主題として、真正面から取上げられ人間の生き方を追求したのは初めてである。ハックスレーは、小説の内容と関係ある言葉を巻頭言として使用するのが常であるが、この小説ではテニスの Tithonus の詩行が用いられている。

The woods decay, the woods decay and fall,  
The vapours weep their burthen to the ground,  
Man comes and tills the field and lies beneath,  
And after many a summer dies the swan. (巻頭)

白鳥を含めたすべてのものは、結局 'lie beneath' する運命にあるということである。

人間にとって、死はどういう意味をもつのか。キリスト教大事典によると、「生物学的にいえば、死は人間というひとつの有機体が、その機能を完全に停止するという自然的現象である。しかし、人間は意識的存在であるから、単なる自然物として死ぬことはできない。人間は死を自己の存在の終結として意識し、自己の存在を死へと運命づけられたものとして意識する。そして、この〈死ななければならない〉という意識が人間の存在を不安なる存在として性格づけているのである。」<sup>2)</sup> つまり、生は常に死におびやかされており、それ故、なおさら、人間は生に執着するのである。また、宗教学辞典によると、「現代は生だけが満ちあふれている時代である。近代合理主義は、現代文化のなかに、死に対する心構えを形成するためのいかなる文化形態も残さなかった。それ故、現代人は自分の死に対しては無防備に等しく、それに直面させられた時なすすべを知らない。そして、人々は、孤独と絶望のなかにうち棄てられ途方にくれるのが常である。」<sup>3)</sup> ストイトは、まさにこのような状態に置かれているのであり、彼は物質的繁栄を旨とするアメリカ資本主義社会、ひいては物質文明社会の悪と苦悩を具現する人物である。

### III

長くなったが、以上のようにストイトは、現世での諸々の欲望を満足させながら、なおかつ、死におびえ孤独な生活を送っている。このストイトを中心に、ハックスレーは、彼の悲惨な現状の原因の分析とその救済の方法を、彼を取り巻く人物、特に対照的なプロプターとオビスボ博士をもとに、また、既存の思想、運動を吟味しながら探究している。前者は神秘主義思想、後者は科学的合理主義を代表し、ストイトに対して善と悪として配置されている。<sup>4)</sup>

まず、神秘主義思想を具現するプロプターをみてみたい。彼は、作中主

としてピートやジェレミーと長々と議論しながら、ストイトを含めた人間全体の救済、より良い未来社会を考え、それを個人と社会組織の二つの観点から考えている。まず、個人については、理想的な生き方は、我々が生存しているこの世は仮のものであって真の実在ではないので、<sup>5)</sup> 我々は事物の本質 (the Nature of Things) を理解し、更に、人間の自我の無価値を理解することによって、無私・無我の境地、すなわち、禅で言う「悟り」、仏教で言う「解脱」の状態に至らねばならないということである。そして、そのためには目を閉じ瞑想することが第一である。概観すれば、このような事であるが、もう少し詳しくみてみたい。プロプターは、この世について二つの事柄を述べている。personality は人間の幻想にすぎなく、時間は悪であるという二つである。我々は、日常様々な欲望に支配され、それ故、悩み苦しんでいるが、その基本であり、また、我々が確固たるものと信じている personality は 'illusory figment of a self-will disastrously blind to the reality of a more-than-personal consciousness' (p. 97) にすぎない。人間は personality が存在すると思うから、この世で束縛を受け、様々な煩惱——欲望・恐怖・権力欲・憎悪・怒り——に苦悩しているのであり、我々は、その結果として一時的には快樂を得たりするが、永続する悲惨に身を置かれ、絶えず欲求不満におちいつているのである。また、時間 (プロプターが言う時間とは、人間が生存しているこの世界そのものようである。) については、極端に論を推し進め、悪の本質として規定している。

'As for time,' Mr. Propter was saying to Pete, 'what is it, in this particular context, but the medium in which evil propagates itself, the element in which evil lives and outside of which it dies? Indeed, it's more than the element of evil, more than merely its medium. If you carry your analysis far enough, you'll find that time is evil . . . .'

(p. 106)

つまり、'Time is potential evil, and craving converts the potentiality

into actual evil.' (pp. 108-9)なのである。この場合、悪というのは、人間をその本質から遠ざけ、墮落させるものである。

それでは、真の實在は何かという問題が起る。プロプターはこれに対して、Cardinal Berulleの人間の定義、及び、John Tauler<sup>6)</sup>の神の定義によって答えている。

'A nothingness surrounded by God, indigent and capable of God, filled with God, if he so desires.' (p.90)

と

'God is a being withdrawn from creatures, a free power, a pure working.' (p. 90)

である。つまり、人間は本来無であり、この世を離れたところに神が存在するのである。そして、人間はそれを悟ることが必要なのである。人間は欲望を絶ち、personalityを超越し、自己の背後に存在する他の意識を感得し、時間を越えた eternity, psychological eternity に至ることが必要なのである。これは、いわゆる、「空・無」の境地であろう。eternityの世界は神の世界であり、精神の世界、すなわち、絶対真理の世界であるが、プロプターはこの世界を色々に表現している。例えば、'the existence of that other consciousness behind his private thoughts and feelings, that free, pure power greater than his own (p. 99) とか 'the spiritual and timeless good that we're capable of as potential inhabitants of eternity, as potential enjoyers of the beatific vision' (p.121) などである。そして、このような世界に至るには、正しい知識を持つ知性と goodwill が必要で、人間は最初知的に、それから動物的直接体験によって、以上のような the true nature of the world を知らねばならない。そして、このような世界で啓発された人間の特徴は、「寂靜」と「無私」である。以上がハックスレーの考えた神秘主義思想の概要である。

さて、インド人は現実感覚の欠乏と合理主義の欠如のため、彼らにとっ

て共同体は無視され、対象は共同体から抽出された個人だけであったが、<sup>7)</sup>西洋的合理主義の持主であるハックスレーは、更に、無執着の生き方に適した社会組織を考えている。それは、一言で言えば、自給自足の Jeffersonian democracy である。

‘The more bosses, the less democracy. But unless people can support themselves, they’ve got to have a boss who’ll undertake to do it for them. So the less self-support, the less democracy. In Jefferson’s day, a great many Americans did support themselves. They were economically independent. Independent of government and independent of big business. Hence the Constitution.’ (p. 132)

つまり、恐怖・欲望・憎悪・横暴を最小限にする組織であり、経済的に安定し、個人が責任を持ち、十分な財産が保障されている社会である。このような自給自足の千人位の共同社会が望ましく、それらの共同社会の集まりで国家を形成すべきである。しかしながら、現在では、大多数の人間が政府や大企業に依存して生活しているのであり、賛成する人は少なく、また、銀行など企業の目的には合致しなく、賛成を得られないだろう。このように、プロプターは説いている。

以上のような神秘主義思想の観点に立って、彼は、この現象世界の様々な現象を徹底的に批判している。例えば、我々が日常善であり尊敬すべきだと教えられている行動や感情——愛国心、社会主義、科学、ロマンティック・ラブ、忠誠、自制、勇気、分別——は、大部分善ではないと、また芸術、科学、学問、人道主義は personality のある一面の投射にすぎないと断定している。これは独断的な morality 論で、大部分の批評家及び読者の敵意を引起こすものと考えられるが、ハックスレーは普通の意味での morality を認めていないのである。この中で、彼は特に社会主義と科学に反対している。彼は『ガザに言いて』『目的と手段』などで、目的は手段を正当化しないと社会主義の暴力革命を激しく攻撃したのであるが、この小説でも、プロプターは、社会主義は中央集権化をもたらし、都会風の犬



量生産を平均化し、人々をおどしてさせるものである。社会変革は大量生産方式によって作り出せるものではなく、あくまでも個人によってのみ達成できると、社会主義に反対し、ピートのスペイン内乱における自己犠牲さえも、personality の強化にはかならないと反対している。科学については後述する。

ハックスレーは、小説中よくその小説の内容を説明する。例えば『恋愛対位法』のフィリップの小説論、『ガザに盲いて』の色あせたスナップショットの配列などである。これは、作者の自分の作に対する自信のなさ、読者への不信、作者の前もっての予防線、自己弁護などの色々な理由が考えられるだろうが、この小説でもよく似たことをしている。その一つは、言葉の問題、言葉の不十分さの問題である。プロプターは、次のように神秘主義と言葉との関係について述べている。言葉は、人間の事柄についての人間の考えを述べるものである。我々が話そうとしているのは、non-human realities で、non-human ways of thinking であり、我々の動物の性質や神、精神、eternity についての直接的、動物の直観は、言葉では伝達できない。つまり、言葉は似たような経験を思出させるだけで、事実に対する言葉上の同価値はないのであり、厳密に人間レベルで使用する言葉を用いて timeless eternity を語ることはできないのである。理解させるためには、新しい言葉の創造が必要であり、そうすれば、人々は新しいことなので結局はまた理解できないのである。これがプロプターの考えである。確かに、言葉は以上のような不十分さを所有しており、また、神秘主義は瞑想により eternity を直観することを第一にしており、言葉では十分説明がつきにくい事柄である。<sup>8)</sup> 例えば、我々は「空、無の境地」と言われても完全には理解できないのである。しかしながら、このような考えを作者に適用するとおかしなことになる。ハックスレー自身、決して瞑想的の神秘主義者ではなく、神秘主義思想を多数の読書により理解していただだけである。この言葉の説明は、明らかに作者自身の自己矛盾でもあるわけで、彼自身、不十分な表現を読み、不十分に理解し、不十分に表現しているこ

とになる。実際、プロプターは、ジェレミーにジレンマを打破する方法はないではないかと問われ、実践の方法、直接の体験による方法があると答えているが、彼自身の瞑想が不十分に一回描写されているだけであり、直接体験の描写はほとんどなく、鍛練方法も記述されていないのである。

あと一つは、文学についてであり、従来の伝統的小説は誤っているとプロプターは次のように述べている。

All the innumerable, interminable anecdotes and romances and character-studies, but no general theory of anecdotes, no explanatory hypothesis of romance or character. Just a huge collection of facts about lust and greed, fear and ambition, duty and affection; just facts, and imaginary facts at that, with no co-ordinating philosophy superior to common sense and the local system of conventions, no principle of arrangement more rational than simple aesthetic expediency. (p. 225)

つまり、今までの小説は、人間の現象面についてだけであり、合理的な unifying philosophy に欠けていると批判している。また、墮落社会において、唯一の安全な態度はゆるぎのない cynicism であり、a good satire は a good tragedy より深く真実を伝え、有益であると述べている。これらは確かにこの小説の説明であろう。<sup>9)</sup>

#### IV

次に、ハックスレーの科学観を見てみたい。科学を代表するのは、オビスポ博士と助手のピートである。ハックスレーは、科学は人間の寿命を長くするが、人間の本質を良くするものとは考えていない。プロプターは、ピートと議論中、彼の長寿の実験を批判して、単に人間の生命を長くしただけでは意味がない。長くすることによって、人間に愚かな行為を繰返させるだけであると述べている。

The longer you live, the more evil you automatically come into contact with. Nobody comes automatically into contact with good. Men don't find more good by merely existing longer. (p. 108)

実際、ゴニスター伯爵は、こいの内臓を毎日摂取することによって、若返りをはかり、永遠の若さと男らしさを維持したかに見えたが、相変わらず忌わしい行為をし、最後に、200年以上生存しながら、人間の進化過程を逆行し、類人猿に退歩したのであった。ストイトは、プロプターを選ばないで、オビスポ博士を選択し、長寿の研究をさせるが、このことは、研究が成功しても、彼もそうなるだろうと暗示している。つまり、科学の万病薬としての可能性はないのであり、それは人間に Tithonus 的要素——命を延長することにより自己に執着させ、どんな犠牲を払っても、自我と personality を持続させようとする——をもたらすのである。<sup>10)</sup> 科学者の真実追求の理想は、この現象世界における personality のある一面の追求にすぎなく、人間を幸福にするものではなく、かえって、科学はその応用を通して、人間の束縛を増加させるものとハックスレーは考えている。

科学を代表するオビスポ博士は、この意味だけではなく、特別の意味を持っている。彼は現実的で物事を科学的に取扱う、科学的物質主義の化身であり、墮落社会で生残れる徹底した利己主義者である。彼は社会での成功は物質的取得であるとし、学問、宗教、哲学、政治的理想を軽蔑し、人間の進歩、幸福、終極の真実に対して幻想を抱かない。彼の土台となる考えは、プロプターの出発点であった人間と神の本質を逆にとり、この世は神が存在しない地獄であり、人間は無であるから、人間はその地獄で最大限に生存するのが正しいということである。そして、彼は自分の意志を他人に賦課し、彼らを永続的の奴隷にして楽しんでいる。彼は、人々を幸福にするのではなく、彼らを地獄の状態により長く不可避的に引きとめているのである。彼は、‘sensuality for its own sake’ (p. 139) を求めて、ヴァージニアを科学的、冷酷に誘惑し、性の地獄に陥れ、また、主人であるストイトを彼のあやつり人形にしている。Keith M. May は、このようなオビスポ博士は悪魔 (Mephistopheles) を表わし、ストイトはファウスト的人物であり、この小説には強いファウスト的テーマが存在すると述べている。<sup>11)</sup> この世の享樂を味わい尽くしているかに見えるが、なおかつ苦

悩んでいるストイトは、「よろめき歩いているファウスト」<sup>12)</sup>であり、博士は、その彼に対して‘an indispensable evil’ (p. 50) として、彼を墮落の状態に誘惑しているのである。ここでは、これ以上触れないが、これは、人類そのものがファウスト的テーマを背負っているということであろうと考えられる。

## V

さて、ストイトの人生上の誤りは何か。これは神秘主義思想から明らかである。彼は現世でのすべての束縛と結合し、性、若さ、所有・権力・金銭などの欲に捕われているからである。彼は、また、時間は有限であるのに無理に人工的に無限にしようとしたからであり、時間の奴隷になっているのである。このようなストイトは神秘主義思想によって救われたか。答えは否である。彼は救われる機会があった。彼にはプロプターの the psychological eternity とオビスポ博士の the promised longevity<sup>13)</sup> の二つが提示されているのであり、彼はどちらでも選択できた。しかし、彼は悪魔主義のオビスポ博士を選んだのであった。ハックスレーの小説の構成の不可解な点であるが、プロプターは折角全人類を救済するような思想を語りながら、自身は全然ストイトに何の働きかけもしていないのである。作者は、プロプターに彼の現象世界や善についての考えをピートやジェレミーと議論させながら、この議論と平行して、ストイトを含めた登場人物の愚行を描いているのである。

この小説において、作者の人物の描き方に特に不可解な点が1つ存在する。それはピートの不慮の死である。彼は生物学者、社会主義者として科学と正義を愛し、それらによって人間の幸せと進歩を作り出そうとする青年であったが、プロプターと議論することによって、彼に次第に感化され、彼の神秘主義思想を信じるようになる。その彼が、プロプターの思想を反すうすることにより、‘celestial peace’ (p. 274) に浸っている時、彼はオビスポ博士とまちがえられストイトに射殺される。ハックスレーは、何故、

好ましい方向に進んでいる人間を殺す必要があるのか。非常に疑問が生じる。これは、善ははかなく悪は栄えるとか、善をなすことの難しさの表現であるのだろうか。これについては作中で多少の説明がある。

Most of us live on the mechanical level, where events happen in accordance with the laws of large numbers. The things we call accidental and irrelevant belong to the very essence of the world in which we elect to live.' (p. 289)

現象世界の仕組とはこういうものである。善をしようとする人間がえてして死んでしまうということであろう。

小説の結末部では、ストイトの救いがたい状態が描かれている。また、プロプターの弟子たらんとしたピートは死んだ。今後の予想として、ストイトは死ぬまで苦しむだろう。ジェレミーは居心地のよい学者の世界で生き続けるだろう。ヴァージニアは色欲地獄にあり、オビスボ博士は悪魔として人間を墮落させ続けるだろう。プロプターは永久に無駄な努力をしていくことであろう。彼は、人間は eternity に達する力を持っていると言いながら、小説にはそれは描かれていない。小説からは人間の救いがたい状態しか伝わってこない。Mayが述べているように、もちろん、この小説の教訓的内容は我々をいらだたせるものであるが、<sup>14)</sup> それ以上にハックスレーの主張と小説との違いが我々をして作者に対していらだちを感じさせる。この小説における神秘主義思想は、彼にとって、人間を救うものではなく、人間の現状を分析するものであると考えられる。

#### 注

Aldous Huxley の作品は、Collected Edition によった。引用文末尾の数字は、作品のページ数を示す。After Many a Summer (London, Chatto & Windus, 1968)

1) Peter Bowering, *Aldous Huxley: a Study of the Major Novels* (London, The Athlone Press, 1968), p.150

2) キリスト教大事典 (教文館, 1963), p.459

- 3) 小口偉一, 堀一郎, 宗教学辞典 (東京大学出版会, 1973), pp. 486, 490, 491 からの要約
- 4) Peter Bowering, op. cit., p. 149
- 5) 雑誌, 理想, No. 466, 神秘思想 (理想社, 1972.3), p. 3 を参照
- 6) Cardinal Berulle は記載されていなかったが, John Tauler は14世紀のドイツの神秘思想家, ドミニコ会修道士でエックハルトを偉大な師として尊敬した。(キリスト教大事典)
- 7) 雑誌, 理想, No. 466, p. 7
- 8) 「ここに起る体験の内容は, 時間・空間の現実的規定を超越し, したがって言語や論理による表現を拒否する。」(キリスト教大事典), p. 576
- 9) 詳しくは Peter Bowering, op. cit., p. 143
- 10) Jerome Meckier, *Aldous Huxley: Satire and Structure* (London, Chatto & Windus, 1969), p. 162
- 11) Keith M. May, *Aldous Huxley* (London, Elek, 1972) pp. 150-152
- 12) Peter Bowering, op. cit., p. 149
- 13) Ibid., p. 152
- 14) Keith M. May, op. cit., p. 141